

途切れゆく心のつながり

いのちのバトンタッチ

「おくりびと」がアカデミー賞

中尾 明けましておめでとうございませす。日頃はオークスさんのコンピュータシステムをインテックにご用命いただき、ありがとうございます。

とところで新門さん、映画「おくりびと」ですっかり全国的人気者に、講演の旅でお忙しいようですね。

青木 「おくりびと」では中尾さんにもご迷惑をおかけしました。僕の「納棺夫日記」を映画化すると聞いたとき、つまり富山で撮影するものと思っただけです。会長にも相談して「協力しよう」といつていただいたのに。

中尾 結局、山形で撮影。でもいいじゃないですか。世界のアカデミー賞をとったんだから。

青木 主役の本木君が富山に来て、会長室で「すみません」と。

中尾 本木君は悪くないですよ。拙宅でも正座して礼儀正しく、またよく勉強している俳優でしたね。彼の誠実さがあの賞につながったんでしょう。映画化のいきさつは。

青木 本木雅弘さんから初めて電話があったんです。二十年前に。インドのベナレスというところで撮った写真の写真を

出したいが、その中で私の「納棺夫日記」のなかの文章を引用させてほしいというものでした。「どうぞ」といったんですが、そのあと映画化したいという手紙が来たんです。私は、あなたがインドで生と死が当たり前のように繋がっているという

ことにショックを受け、「蛆が光ってみえた」という私の文章を選ばれた。その視線で



インド・ベナレス ガンジス川

映画化されるんなら誰にも著作権を渡しませんからと返事したわけです。

ただ、映画でひとつどうしても納得のいかなかったことがあるんです。最後の場面、なくなったお父さんが、いつてみれば「土左衛門」だったんですが、私としてはまだ息のあるうちに手を握って「ありがとう」といいながら死んでいく、そうしてほしいと願っていたのですが。

みんなが望んだ自宅死

中尾 新門さんのいう「いのちのバトンタッチ」ですね。ところで、昭和三十年代までは日本人はほとんど自宅死。病院にい

ても最後はみんな自宅死を望んだんです。親族に看取られて。だから遺体を拭くのも親族でした。

青木 ですから私も納棺夫として入社したわけじゃないんです。そんな日本語、辞書にもなかったし。インドでは川のそばで親族が火葬。いわゆる「荼毘にふす」ですね。ガンジーもネールも親族が川で洗って荼毘に。

中尾 私の村もそうでした。親族が野原の火葬場に棺をかついでいき、薪を積んで荼毘にふす「野辺の送り」ですね。ネパールでは死人の頭を石で割って鳥に食べさせる。「鳥葬の国」(川喜田二郎著)で昔、読み



「オークス カナルパークホテル富山」周辺の街並み



青木 新門氏 対談 中尾 哲雄

Shinmon Aoki X Tetsuo Nakao

途切れゆく心のつながり いのちのバトンタッチ



青木 新門氏
(あおき しんもん)

1937年富山県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退後、富山市で飲食店を開業。73年、冠婚葬祭会社(現オークス株式会社)入社。専務取締役を経て現在、顧問。93年、葬儀の現場での体験をつづった「納棺夫日記」を発売。同書は映画「おくりびと」の原案となった。



ました。その場合も、石で割るのはいい。この役目なんです。
青木 葬祭会社で働いているうちにいつの間にか納棺夫。あの頃、白い眼で見られましたよ。

悟りとは 平気で生きていくこと

中尾 あなたは納棺夫として、どんな死に方でも、みな柔和な顔をしている。そのうち冷たくなって物体にと、いつておられますね。

青木 そうなんです。死の間はみな穏やかな顔。交通事故で亡くなったお子さんも、湯灌しているときは眠っているように柔和な顔をしていました。犬や猫も一緒なんです。

中尾 しかし人間は死への恐怖感や不安を持つていると思うんですが。死の瞬

間まで苦しめぬいた人も穏やかになるのかな。本木君が今出ているテレビ、「坂の上の雲」の中で子規は七転八倒している。それでも死ぬときは。

青木 正岡子規は死の二週間前にあの「病床六尺」を書きましたが、その中で悟りというのはどんなことがあっても平気で死ぬることだと思っていたが、そうではなく平気で生きることと悟るんですね。

中尾 悟りというのは達観していくという感じがいたしますが。

青木 達観じゃなくて、地震や金融危機、重い病気でも平気で生きていく、それが悟りだということなんです。テレビにも出てきました。本木君演ずる秋山真之、海軍士官としてアメリカにいて、子規に「遠くても五十歩百歩、小世界」と書いて絵はがきを送るんですね。子規は号泣しました。三千大世界を知っている者でないとい小世界がわからない。明治の人々には永遠を認識し、今という一瞬一瞬を生きている姿があったように思います。

蛆も生命 だから光ってみえる

中尾 ところで本木君が写真集に引用したあなたの蛆の話、簡単にしてくれませんか。

青木 あれは異常な現場でした。警察

のつながりが少しあやしくなってきた、なぜかな。

青木 それはヨーロッパの近代思想が人間中心になったことにもよるのかもしれない。人間中心だと個の命が中心になって命の繋がりがなくなると、気がつくとき自己中心になってしまった。

日本人の「折り合い」

中尾 ヨーロッパの近代思想という少し関係があるのですが、先月「小泉八雲とローエル」と題して講演しました。ローエルは「極東の魂」(The Soul of the Far East) (二八八八年)の中で、日本人に個性がない、日本の芸術にも、没個性といっているんです。進歩しつづける西欧諸国の眼前で滅亡する運命にあるとまで言うています。ローエルより十二年あとで日本に来たラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、家族、社会の中で個を抑え、少しあまい日本人の折衷主義を折り合いをつける結果であり、折衷的であることをむしろ個性がないのではなく、日本人の特性とみてるんです。八雲が古い日本を代表する特性としているのは「親切、礼節、自制心、献身、親孝行、信義そして少しばかりのもので満足する能力」と書いているんです。

その古い日本がなくなって、新門さん

からお棺を持ってこいといわれ出向くと、一人暮らしの老人が、死んで何カ月もたっていたんです。布団のまわりに豆をばらまいたように白いものが動いている。蛆なんです。布団をはぐった瞬間ぞっとしました。肋骨の中で無数の蛆が動いていたんです。蛆をはき集めているうちに、一匹一匹が鮮明に見えてきたんです。そして蛆たちが捕まるまいと必死に逃げているのに気づきました。蛆も命、そう思うと蛆たちも光って見えました。

死が近づいて死を真正面から見つめていると、人間も虫もあらゆるものが光って見えてくるようになるのかもしれない。仏教のいう「一切衆生悉有仏性」の世界だったのかもしれない。



本木雅弘氏と

中尾 納棺夫という実際の経験に基づく話、とても重みを感じますね。ところで蛆にも命のつながりがあるのに人の命

がいうようにあまりにも俺が俺がの個中心になっちゃったということでしょう。私は明治の頃までの日本人の謙虚な個、それが今もそのままいいとは思いません。それを脱していくんなら、しっかりと芯のある個になっていかないとダメだと思えます。自己中心のいわゆる個人主義が祖先からの命のつながりまでも断ち切ってしまうてはいけません。

青木 あの頃(明治)は日本がどんどん近代化に向かっていた時です。

中尾 日本における近代登山の開拓者ウエストンは「知られざる日本を旅して」(一九二五年)の中で、明日の日本は物質的には今よりはるかに富んでいるだろうが、絵のように美しい日本はなくなっていくだろうといっています。あのハリスもまた、下田の領事館にアメリカ国旗を上げた日(一八五六年九月四日)の日記に「厳粛な反省 変化の前兆 疑いなく日本で新しい時代が始まる。あえて問う、日本の真の幸福になるだろうか」と。その通り、日本は多くのものを失ってききましたね。

青木 私は「親鸞」を書きましたが、親鸞は「教行信証」という本を出しています。あの本の九割は過去の仏典や如来からの引用で、ほとんど自分の主張がないんです。没個性。一割ほどあるのは懺悔と讃嘆だけです。それでいて親鸞ほど個性

途切れゆく心のつながり

いのちのバトンタッチ



的な人間はいない。

中尾 ところで新年から死者の話ばかりはどうかと思っただんですが、先ほども話し合ったように、いつも死者は静かで美しいと思えてくる、という話。もう少ししてくださいませんか。

死者の顔は安らかで美しい

青木 そうですね。私も最初は恐る恐る嫌々やっていました。しかしやがて毎日死者に接しているうちに、死者の顔は安らかで美しいと感じるようになったのです。これが死の実相ではないかと。ローマの哲人セネカが「人が死を恐れるのは死そのものではなく、死の不随物を見て恐れている」と。また、例えば宮沢賢治の童話に登場する動物の死顔は、みんなにつこり微笑んで描かれています。アンデルセンの「マッチ売りの少女」も「翌朝、少女は家と家の間に、赤い頬をして、口元に微笑みを浮かべて死んでいたのです」とあります。このように死を美しく書けるのは死の実相を知った作家だからです。ところが今日の社会は、死の実相を知る場を無くしています。核家族化、仕事の広域化、高度医療など、いろいろな要因で臨終の場に立ち会えなくなっています。そのことは「いのちのバトンタッチ」がなされていないということなのです。

心のバトンタッチ

青木 葬式の現場に長く居ますと、いろんな家があることに気づきます。憎しみや怒りが渦巻いている家、悲しみの中にも和気が漂っている家、いろいろです。その和気が漂っている家は死に往く人が眼に笑みを浮かべて「ありがとう」と言っていて亡くなるのを親族が立ち会っていた家でした。それがいのちのバトンタッチです。親鸞の「教行信証」のあとがきに道綽禪師の安楽集から引用された言葉が載っています。

「前に生まれんものは後を導き、後に生まれんひとは前を訪へ、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんがためのゆえなり」

中尾 三十八億年前、海の中で生まれた細胞から、様々な生き物が生まれ、そこから人間も。生命は永くつながってきた。これからも。でも、新門さんのいうバトンタッチは単に細胞でなく心だということですね。いわゆる個人主義も死に目に会えないということも、真の意味で命がバトンタッチされていないということかな。新しい年を迎えて、われわれは、というより自分は何なのか、どこへ向かっているのか、改めて考えさせられました。青木さん、この話の続きは本木君と三人でやりましょうか。